

言葉の馴染み度とアクセントとの関係

秋 永 一 枝

(田中ゆかり・松永修一・吉田健二)

キーワード

言葉の馴染み度・東京アクセント・伝統的アクセント・類推アクセント・
言葉の使用意識

I. はじめに (秋永一枝)

I.1 要旨 個人における言葉の馴染み度とアクセントには深い関係がある。また馴染み度は個人の使用意識とも深く関わる。さらにその言葉が日常よく使われるものかどうか、或は家庭内専用の言葉か否か、などもアクセントの変化を考える上で重要である。伝統的アクセントは音声を媒介として伝わるが、文字を媒介としては伝わらないことから、保育者の生育地もアクセント変化を考える上で問題とすべきである。以下、馴染み度調査と東京アクセントとの関わりについて考えてみた。

I.2 馴染み度調査の概要 調査項目は250項目。内訳は、これまでの秋永の調査表から133項目、柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一共編「東京アクセント資料 上・下」から113項目、その他追加4項目となっている。秋永項目には、家庭環境などインフォーマントの傾向を調査するための項目も含まれている。調査は、アンケート形式でそれぞれの項目について「ふだんよく使う」「まれに使う」「分かるが使わない」「知らない」の4段階を設け該当する箇所には○を記入してもらった。記入の際、教室での集団記入、郵送、面接、留め置きの方方式をとった。

調査は、上記の方式によって1989.11~90.6の期間に、成人506人を対

象に実施した。生育地・年齢など基本的なデータが不備のものを削除し、計 500 人のデータを分析することとした。

なおこの調査は文部省重点領域研究『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』（東京班）の補助を得て行なったものである。

I.3 データの処理 データの処理には、荻野綱男氏の GLAPS を使用した。沢木幹栄氏の御助力を得て、松永・田中が行なった。なお、このデータは第一次調査である。地域差・男女差をそろえた第二次調査も既に実施、現在分析を進めている。

I.4 略語表

I.4.1 馴染み度

- ふだんよく使う : a
- まれに使う : b
- 分かるが使わない: c
- 知らない : d

I.4.2 属性

- 性 別 m : 男性
- f : 女性

- 年 齢 1 : 29 歳まで
- 2 : 30~49 歳
- 3 : 50~69 歳
- 4 : 70 歳以上

- 生育地 1 : 東京都 23 区内
- 2 : 首都圏(都下・神奈川県・埼玉県・千葉県)
- 3 : 地域 1・2 以外
- 9 : 不明

I.4.3 アクセント注記辞典略語表

- 美 : 日本大辞書(1893)

神 : 国語発音アクセント辞典(1938)
三 : 新辞海(1938)
金 : 明解国語辞典(1952)
NA : 日本語アクセント辞典(1943)
秋 : 明解日本語アクセント辞典(1958)
平 : 全国アクセント辞典(1960)
NB : 日本語発音アクセント辞典(1966)
NC : 日本語発音アクセント辞典(1985)
柴 : 新明解国語辞典第四版(1989)
N研: 大辞林: (1988)

I. 4. 4 資料

『東京語アクセント資料 上・下』: 柴田武監修, 馬瀬良雄・佐藤亮一編(1989)

II. 日常使われなくなった物のアクセント (松永修一)

II. 0 はじめに

我々の生活様式が, ひと昔前に比べ大きく様変わりしていることは多くの人が感じ, またいろいろなところで言われてきている。

台所一つをとってもそうであろう。呼称にしても, 「炊事場」ではなく「キッチン」であり, 「かまど」なる物は消滅し, 米は「お釜」ではなく「電気釜」で炊き, 冷めた食品は「チンする」等々。消え去った物, 新しくできた表現と, いろいろである。このように, かつて我々の生活の中で, 日常的に使われていた物や道具で, 近年使われなくなってしまった物は, 数多くある。

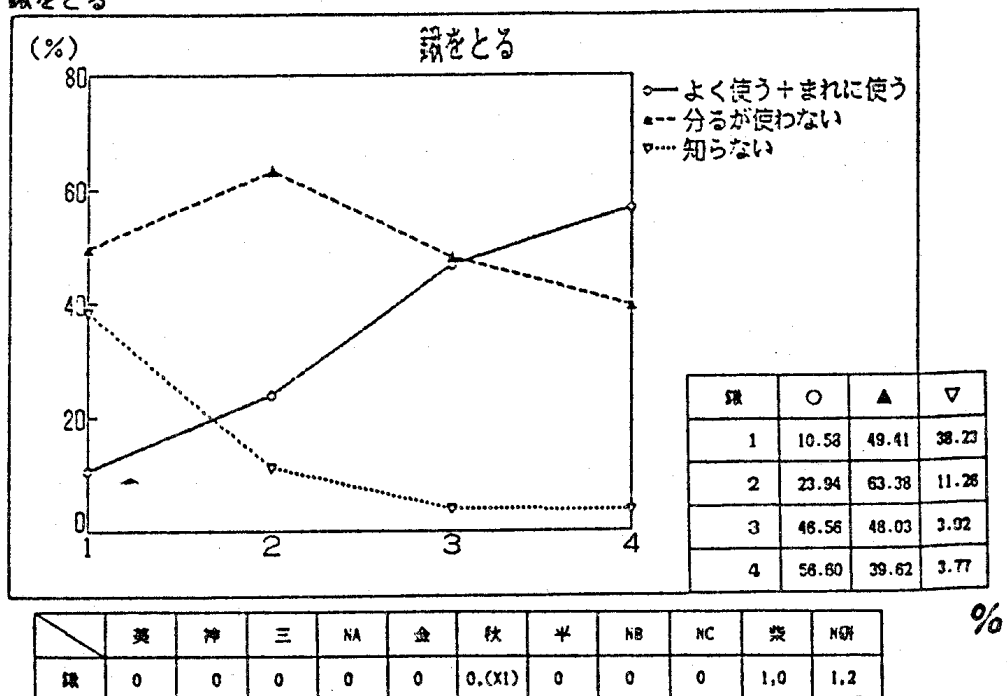
ここでは, それらの言葉の馴染み度とアクセントが, どのような関係にあるかについて, 見て行きたい。

対象の語彙は, 調査項目の中から「鍬」・「苗代」・「よしず」・「茶釜」・「灰汁」・「油単」の6項目である。

II.1 「鍬(をとる)」

まず、「鍬」であるが、表 II.1 を見て分かるように、若年層で「知らない」と答えた者の比率が 38% 強と非常に高いことが注目される。確かに、都心部や近郊で農地が激減している現在、この道具を見る、まして、使う機会などなくなってしまっている事は、容易に想像出来るだろう。そのことからこの結果はしかたがないと言えるかもしれない。しかし、この中には「鍬をとる」という形では知らない、という人も含まれているだろう。

II.1 鍬をとる



また、年齢層が上がるにつれ、この語の馴染み度も上がっている事がはっきり読み取れる。それでは、この語のアクセントはどうであろうか。アクセント注記辞典で調べてみると、伝統的なアクセントは、平板型と見る事が出来る。

しかしながら、『新解明国語辞典第四版』、『大辞林』と新しい辞書の注記を見ると、従来の平板型だけでなく①型・②型がでてきていることがわかる。特に①型は『明解日本語アクセント辞典』では「避けたい」の

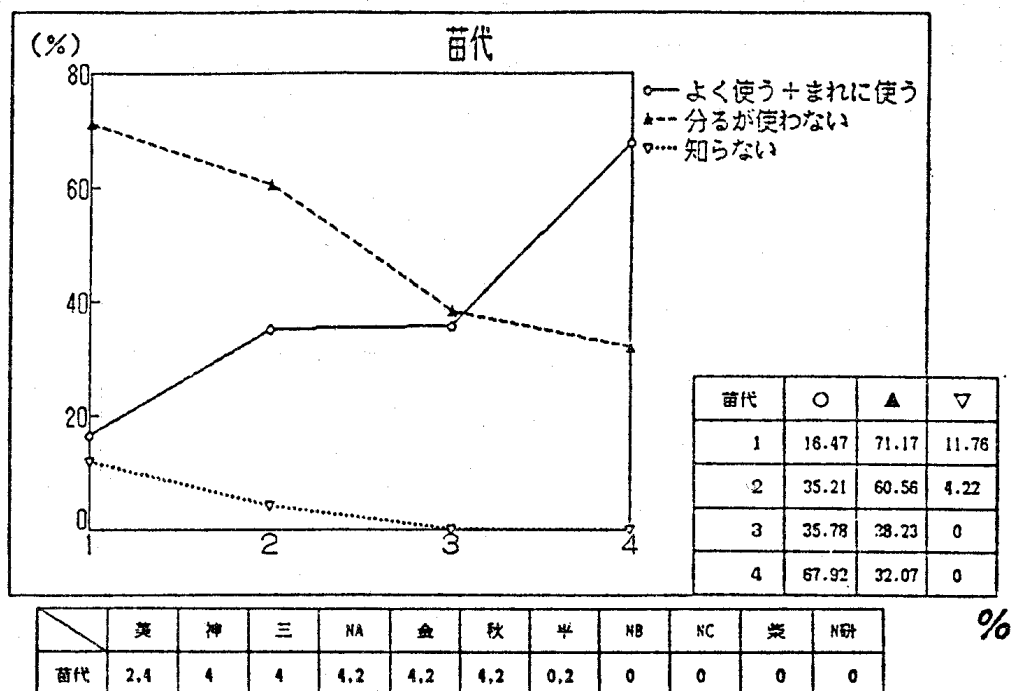
注記がある型である事は注目できる。

さてこれはどういう意味を持つのだろうか。考えられるのは、やはり、この語があまり馴染みのないものとなったため、伝統的なアクセントは継承されず、多数形への類推アクセントで発音する者が増えてきたことに因るからであろう。また ② 型は『東京語アクセント資料 上・下』で確認できる 3 人の発音と思われる。

II.2 「苗代」

次に「苗代」表 II.2 であるが、これもまた驚く事に、若年層の 12% 弱が「知らない」と答えているのである。

II.2 苗代



これは、米が日本の主食でひとかたならぬ思い入れがあるものだとはいえ、最近では、苗代を頻繁に見る事が出来ない環境になってきたためと考えられる。

そのため、この語の馴染み度も、年齢層が上がるにつれて高くなっている。(表 II.2)

アクセントの方を調べると、『明解アクセント辞典』までは ④ か ② の型であったのに、『全国アクセント辞典』以降 ① 型が入ってきており、『日本語発音アクセント辞典』(1966) 以降は全て平板型のみで記されている。

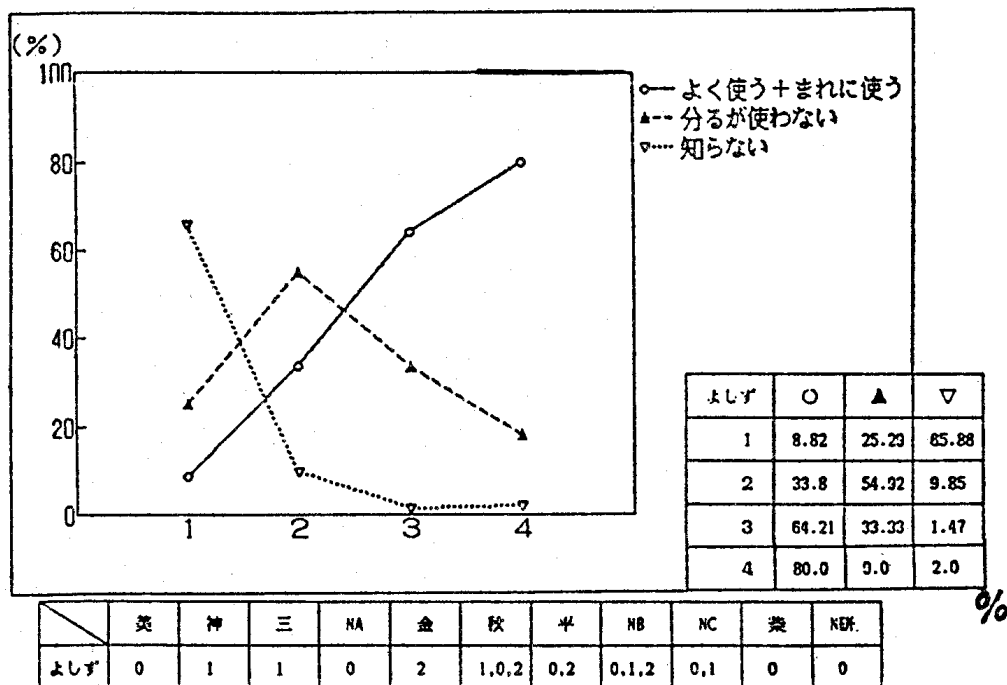
これも、元々あった古いアクセントが、語の馴染み度が下がったため保存されず、尾高型から平板型へというアクセント変化の波に乗って、新しく平板化したものであろう。

II.3 「よしず(をはる)」

「よしず」もまた、アルミサッシと網戸の出現という家屋事情の変化によって、消滅しつつある物である。

予想どおり「知らない」と答えた若年層は、66% 弱とかなりの数である(表 II. 3)。馴染み度も、年齢層が上がるほど、見事に高くなっている事が分かる。

II.3 よしずをはる



アクセントの方も辞書のアクセント注記を調べると、① 型・② 型がなくなり平板型が主流になっている。これもやはり平板化が進んだものの一

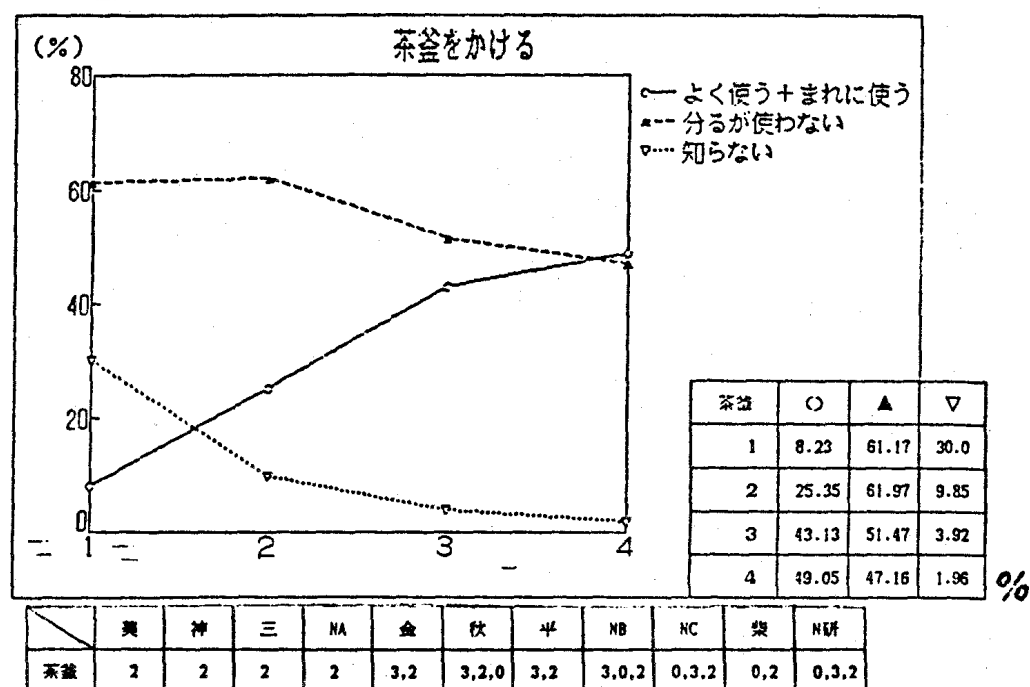
つと考えられるであろう。

先日、下町の路地に迷い込んだのだが、そこではよしずばりの縁側でうちわをもち、涼みながら語らう人たちを多く見かけた。もしかしたら、この語は東京でもかなり地域差がでてきているのかもしれない。

II.4 「茶釜(をかける)」

「茶釜」も若年層では「知らない」と答えたのが、30% と高い数字を示している(表 II. 4)。これも一般の家庭では見られなくなった物の一つであろう。

II.4 茶釜



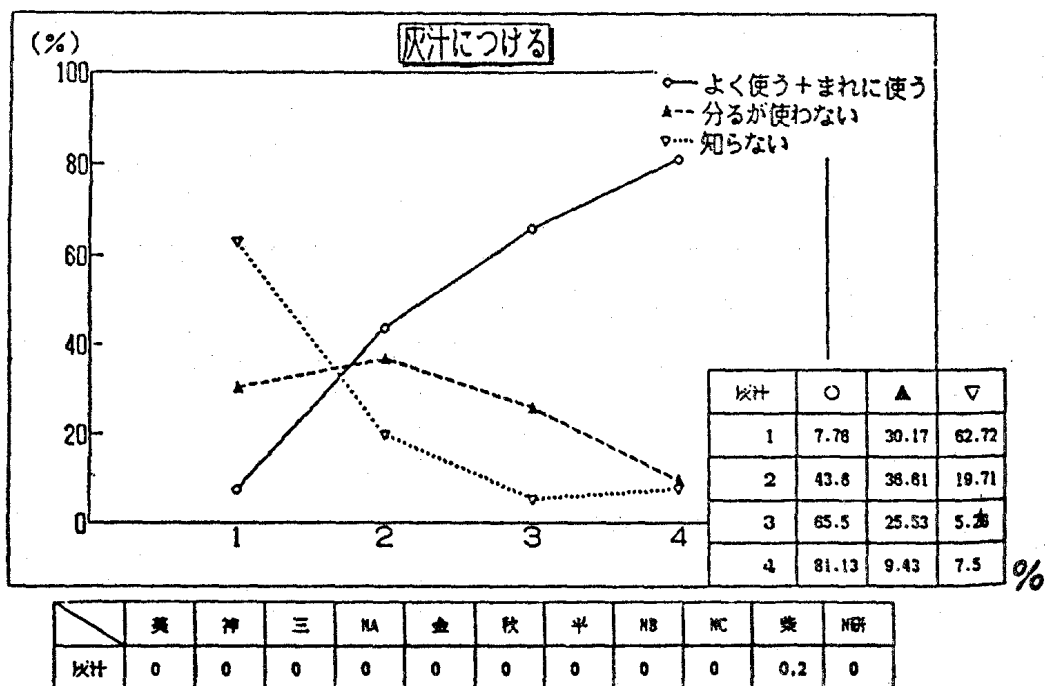
また表から、語の馴染み度も年齢層とともに高くなっている事が、はっきりと見て取る事が出来る。

それではアクセントはどうであろうか。各辞書の注記を見て行くと『明解国語辞典』まではなかった ㊦ 型がそれ以降主流となってきた事がわかる。この語のアクセントも、いずれ平板型だけになってしまう事が予想できる。

II.5 「灰汁(につける)」

「灰汁」も「知らない」と答えた若年層が多かった訳だが（表 II. 5）, 「灰の汁」を「あく」という事が分からないので, 「スープのあくをとる」で質問すれば恐らくこの%は下がるだろう. 顕著な男女差がでなかったのも「灰汁」だからであろう.

II.5 灰汁につける



この語も, やはり年齢層が上がるにつれ, きれいに馴染み度も高くなっていることがわかる.

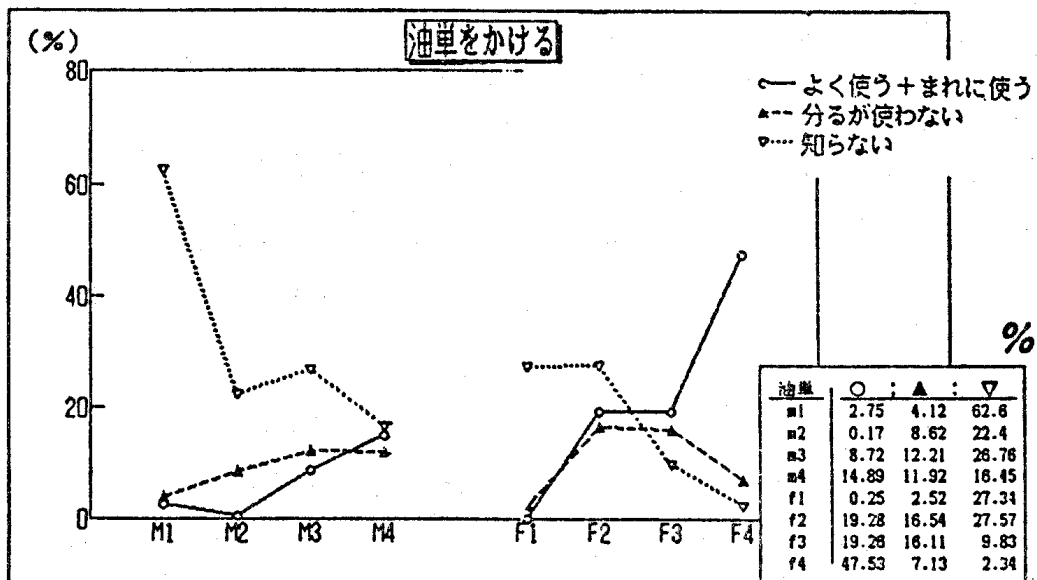
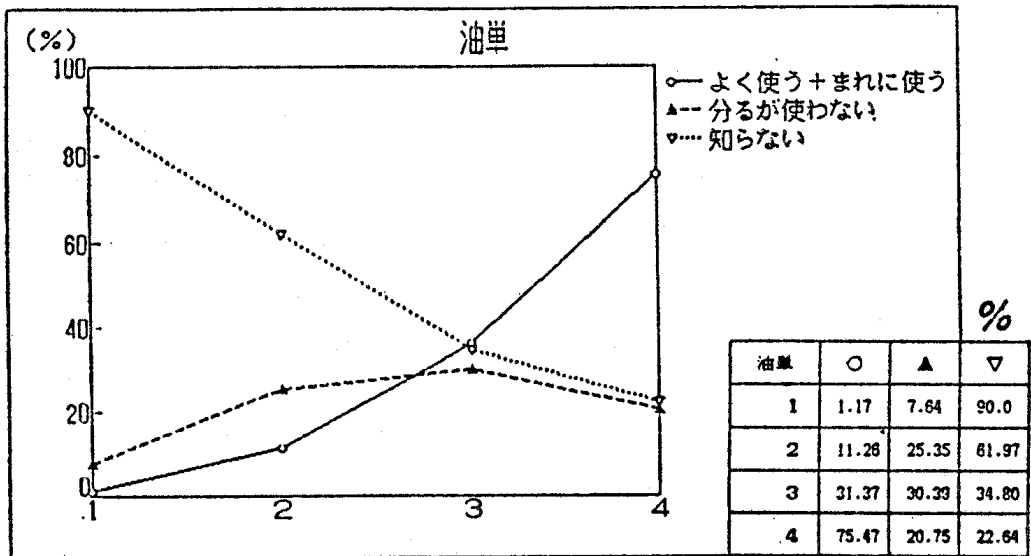
アクセントの方は辞書の注記でみると, もともと平板型であるようだ. 『新明解国語辞典第四版』で ② 型がみられるがこれは『東京語アクセント資料』によるものである.

II.6 「油単(をかける)」

「油単」も若年層の 90% が「知らない」と答えている. 調査項目の中でも, かなり高い数字を示したものの一つである. (表 II. 6.1)

この語は男女差がはっきりとでている. (表 II. 6.2) 男性の「よく使う+まれに使う」の若年層から高年層への伸びを, 女性のものに比べてみると, その差がはっきりする. つまりこれらの語彙は, 高年層の女性には馴

II.6.1油単をかける



	美	沖	三	HA	金	秋	平	H8	HC	榮	H研
油単	1	0	0	1	1	0.1	N	0.1	0.1	0.1,2	0.1

染みのあるものだが、男性には年齢に関係なくあまり馴染みのない言葉である事が分かる。当然これらの語彙は、そのもののアクセントとも大きく関係してくるわけだが、和服関係用語は特に男女差がでることがわかっている¹⁾。

1) 秋永一枝「アクセントに現れた男女差」(「解釈と鑑賞」1991.7)

アクセントも、辞書の注記を調べていくと、平板型が優勢になってきている事もわかるだろう。

II.7 まとめ

これまで、日常生活で使われなくなってきた道具や物について、その語の馴染み度とアクセントの関係について見てきた。そのなかで、馴染み度が低いものは、伝統的なアクセントを継承する事なく類推アクセントで発音されるようになってきている事が、これらの共通のものとして確認できた。

生活様式が大きく変わりつつある現在、このような語は更に増えていくと思われる。

III. 対立する語の連なった名詞 (吉田健二)

III.0 表題のような「対立語」について今回の調査では、名詞からなるもの(「右左」)、動詞からのもの(「生き死に」)、形容詞からのもの(「高ひく」)の三種類³語をとりあげた。これらの語のアクセントについて、表 III.1.2 の各資料の記載を表 III.3 の馴染み度調査の結果と対照させて考えてみることにする。

III.1 「高ひく」は ① 型が伝統的で、辞書も大方 ① 型のみを載せているが(表 III.1 参照)、表 III.2 の「十九人」資料中には ② 型が多い。佐藤亮一(1990)¹⁾は、この資料では ① 型と ② 型との間に伝統的差は見

表 III. 1

* 各辞書記載のアクセント *

	美	神	三	金	NA	秋	平	NB	NC	柴	国
右左	N	2	N	3	3	2,0	3,0	3,0	3,0	2,0	2,0
生き死に	1,3	1,3	N	N	1,3	1,3,2	N	2,1,3	2,1,(3)	2,0,1	2,1
高低	1	1	1	1,0	1	1	1	1	1	1,2,0	1,2,0

1) 佐藤亮一「現代東京語のアクセント」(1990) (『講座日本語教育第2巻 日本語の音声・音韻(上)』)

表 III. 2

見出し ・ 語 形	新N明全 明H解国 解Kアア	X y 山下 5520	A b C d E F g H i J K l m N o P q r s 下山下山下山下山下山下山山山山下山山山 62595858535047434339393535303029292011
右左 ミセリ/オ	3 3 2 3 0 0 0	2 0	0 2 2 2 2 2 0 3 0 2 0 2 2 2 2 0 0 2 0 2 2
生き死に イシニ/ニ	1 2 1 1 3 3 2	2 1	2 2 2 2 0 0 0 2 2 1 1 0 2 1 2 0 0 2 1 2 2 2
高低 タビリ/イ	1 1 1 1 0	1 1	0 2 2 0 1 1 1 1 0 1 1 1 1 1 0 0 2 2 1 M M 2 M 2 2 2 2

られないとする。そこで表 III. 3 を見ると、この語がことに若年層ではほとんど使われない、非常になじみの薄いことばであることが分かる。また、表 III. 2 を見ると、A, d, i のインフォーマントは ① 型を答え、下に「M」の記載(まれにしか使わない)がある。このことから考えると、② および ③ 型を回答したインフォーマントは、年齢に関わらずこの語になじみが薄い可能性がある。② 型は癒合名詞の法則²⁾に従ったもので、この語に対する馴染みが薄いため伝統的な型に関する情報を失なっていることが、この型に収まっていく要因であると思われる。馴染み度に明らかな年齢差のあることを考えると、伝統的な ① 型とここでの ② 型の間には「十九人」という程度の人数では現れてこない年齢差が実際にはあるのではないと思われる。

III. 2 「生き死に」は ① 型と ③ 型が伝統的である。ここでの ③ 型は複合法則³⁾からすると本来 ② 型であるが、二拍目が無声化するため核が後にずれたものである。表 III. 2 を見ると ③ 型が皆無であるが、若年層については、無声化して、しかもアクセントがずれなくなっているとい

2) 『明解日本語アクセント辞典第二版』(秋永一枝 / 1981) の付録, p. 10. アクセント習得法則 4 の II-(2) を参照。

3) 注 2 の書の付録, p. 20. 習得法則 18 の I-(3) を参照。

表 III. 3

使用度／右左

<東京23区内>

年齢	よく使う	まれに使う	よく+まれ	わかるが使わない	知らない
~29	16.7	13.3	30	63.3	6.7
30~49	13.3	36.2	70.2	25.5	4.3
50~69	49.2	30.5	79.7	20.3	0
70~	48.5	45.5	93.9	6.1	0

<首都圏>

年齢	よく使う	まれに使う	よく+まれ	わかるが使わない	知らない
~29	29.0	36.2	65.2	31.2	2.9
30~49	25	62.5	87.5	12.5	0
50~69	31.6	42.1	73.3	15.8	0
70~	83.3	0	83.3	50	0

使用度／生き死に

<東京23区内>

年齢	よく使う	まれに使う	よく+まれ	わかるが使わない	知らない
~29	3.3	26.7	30	63.3	6.7
30~49	21.3	48.9	71.2	29.8	0
50~69	39.8	36.4	76.3	22.9	0.8
70~	50	29.4	79.5	17.6	2.9

<首都圏>

年齢	よく使う	まれに使う	よく+まれ	わかるが使わない	知らない
~29	8.7	18.8	27.5	63.8	8.7
30~49	37.5	50	87.5	12.5	0
50~69	47.4	36.8	84.2	15.8	0
70~	16.7	33.3	50	50	0

使用度／高低

<東京23区内>

年齢	よく使う	まれに使う	よく+まれ	わかるが使わない	知らない
~29	0	6.9	6.9	13.8	79.3
30~49	2.2	4.3	6.5	50	43.5
50~69	27.4	23.9	51.3	33.3	15.4
70~	50	32.4	82.4	17.6	0

<首都圏>

年齢	よく使う	まれに使う	よく+まれ	わかるが使わない	知らない
~29	0	1.4	1.4	18.8	79.7
30~49	0	25	25	50	25
50~69	31.6	15.8	47.4	42.1	10.5
70~	50	16.7	50	50	0

う傾向を反映したものと考えて問題はなさそうである。しかし、高年層に至っても ③ 型が全く現れないというのは疑問である⁴⁾。表 III.3 を見ると、三十代まではまだ比較的よく使われていることがわかる。「高ひく」よりは今でも生きていることばと言え、③ 型を持つ話者がもう少しいてもよいように思われる。

III.3 「右左」は ② 型が伝統的であり、表 III.2 を見ると「十九人」資料中にも、他の二語と比べると比較的よく伝統的な型が保持されている。また、表 III.3 を見ると、三語中この語がもっともよく使われていることが分かる。伝統的アクセント型の保持と、馴染み度との関わりを示す好例であると思われる。③ 型は熟語化が進んで結合名詞の法則⁵⁾に従ったものであるが、② 型が比較的よく保持されているのに、多くの辞書が③ 型を採って② 型を採らないのは不思議である⁶⁾。

III.4 以上ことばの馴染み度と伝統的なアクセント型の保持との関わりについて考察した。馴染み度の差すなわち年齢差、とは必ずしも言えず、個人の生育環境などによって馴染み度は違うであろうから、表 III.2 の「十九人」程度の人数ではこのようなアクセントのゆれに関する年齢差がつかみにくいと思われる。

ところで、三語とも、しかもどの年齢層にも ① 型が現われる。これは、これらのことばを「生きた語彙」として持っていない人が、その語のアクセントに関する情報を持っていないために、無標の安定型である ① 型で答えたにすぎない、という3語すべてに共通する事情である可能性が高い。「高ひく」の ② 型、「右左」の ③ 型も同様に、伝統的な型に関する情報を持たない者が、一般的な結合名詞の型に類推して答えた型である

4) 実際には ③ 型を答えたインフォーマントがあり、それをも ② 型に聞きなしてしまっただけとも考えられる。

5) 注2の書の付録, p. 15. 習得法則12のII-(1)を参照。

6) 『明解国語辞典』(1952)の定義に「右と左をとり違えること。逆。足袋が右左だ」というのがあり、ここで熟語化した③型が採用され、その後多くの辞書がそれに倣ったということが想定される。

にすぎないと考えられるのである。このような型をすべてその語のアクセント型であるとしてよいものかどうか、ことに辞書にはどこまで記載するかということが考慮されるべきであるように思う。

IV. 語の馴染み度と使用意識について（田中ゆかり）

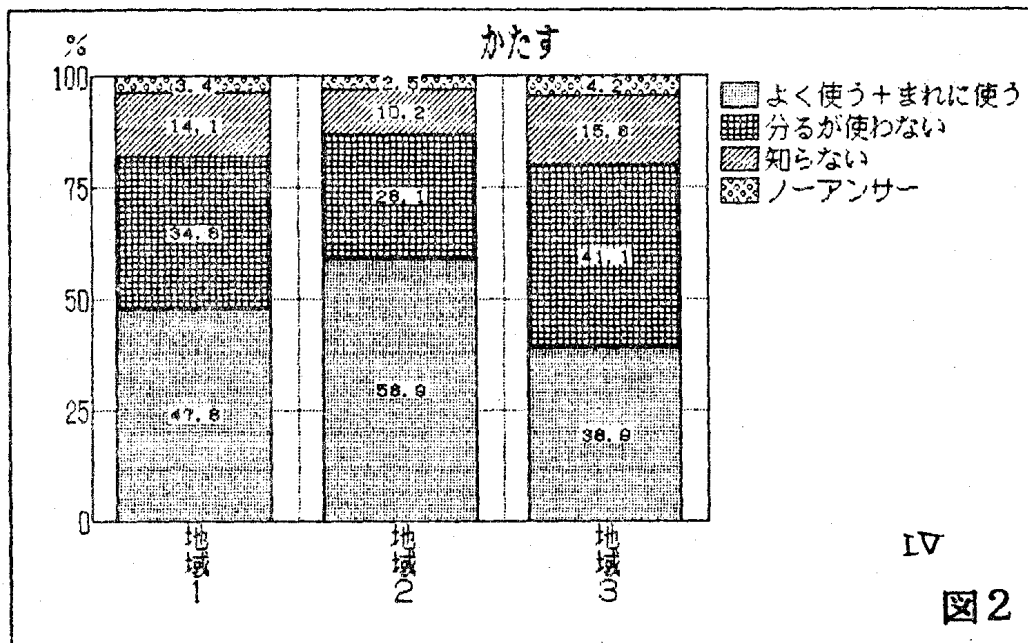
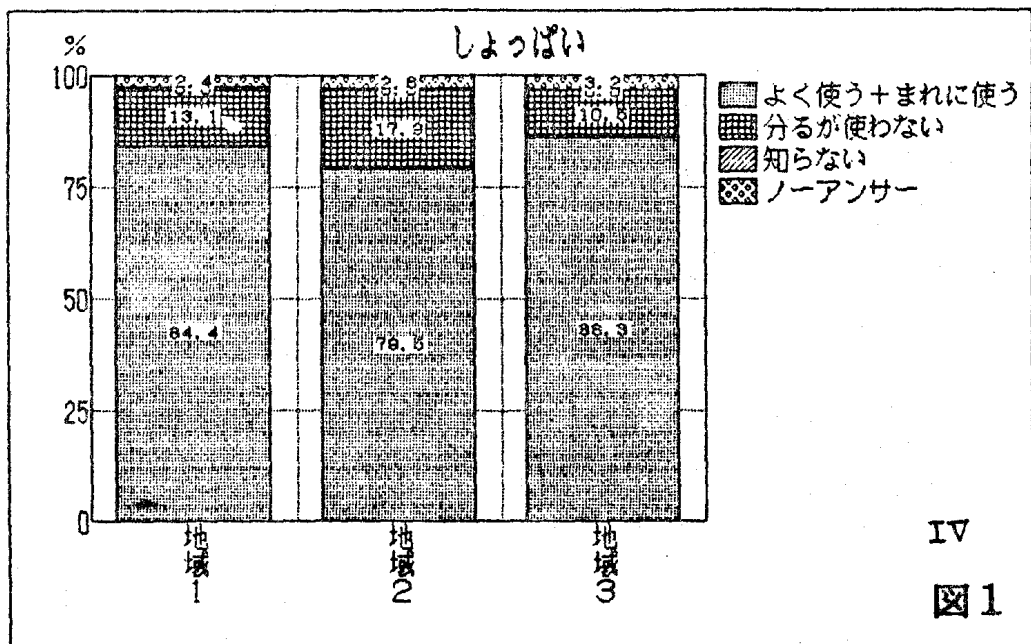
IV. 0 はじめに I~III・V は、語の馴染み度とアクセントとの関係という観点から見た項だが、ここでは、語に対する馴染み度と使用に際しての意識＝使用意識について考えてみる。今回は、語彙が中心だが、例えば、いわゆる「業界ことば」ではアクセントが平板型になりがちのように、使用意識とアクセントとの間にもある意味で密接な関わりがあると考えられる。

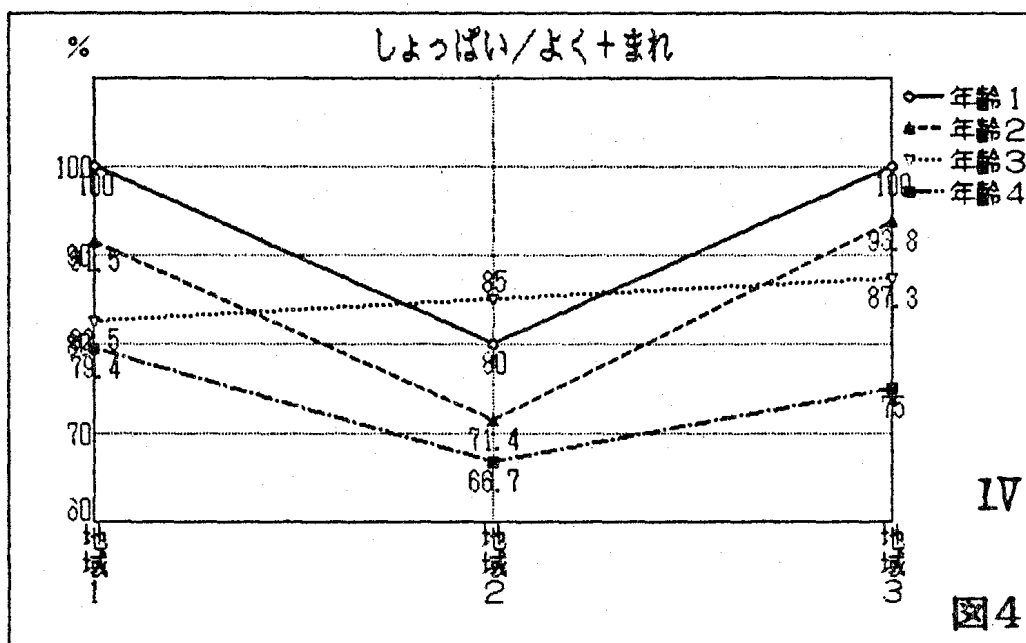
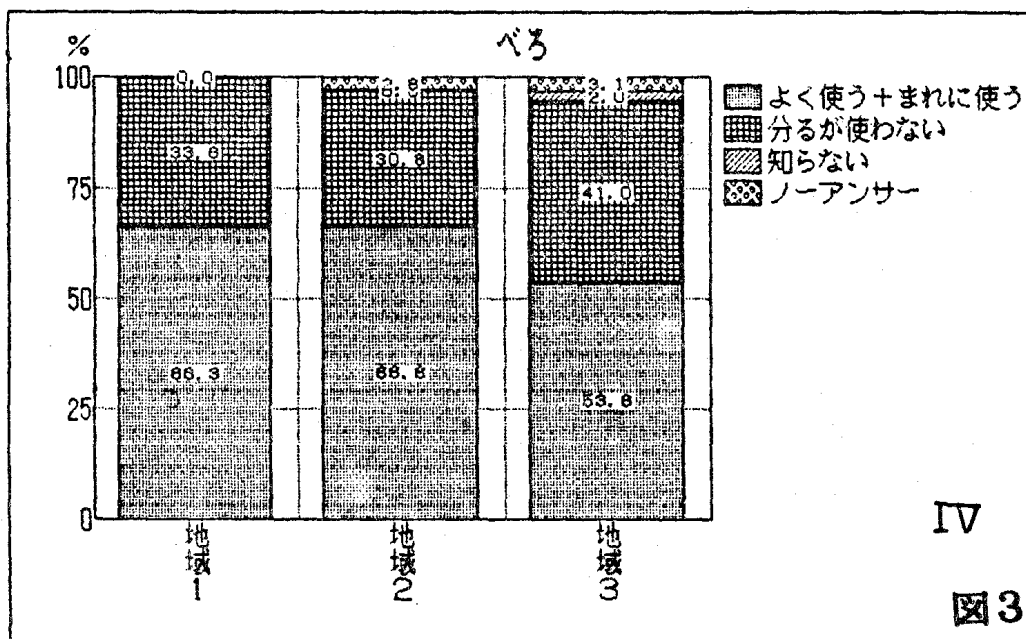
IV. 1 馴染み度調査結果 今回は、「ショッパイ（塩の味）」「カタス（かたづける）」「ペロ（舌）」の3語を対象とする。全体での馴染み度調査結果は、次のようになった。

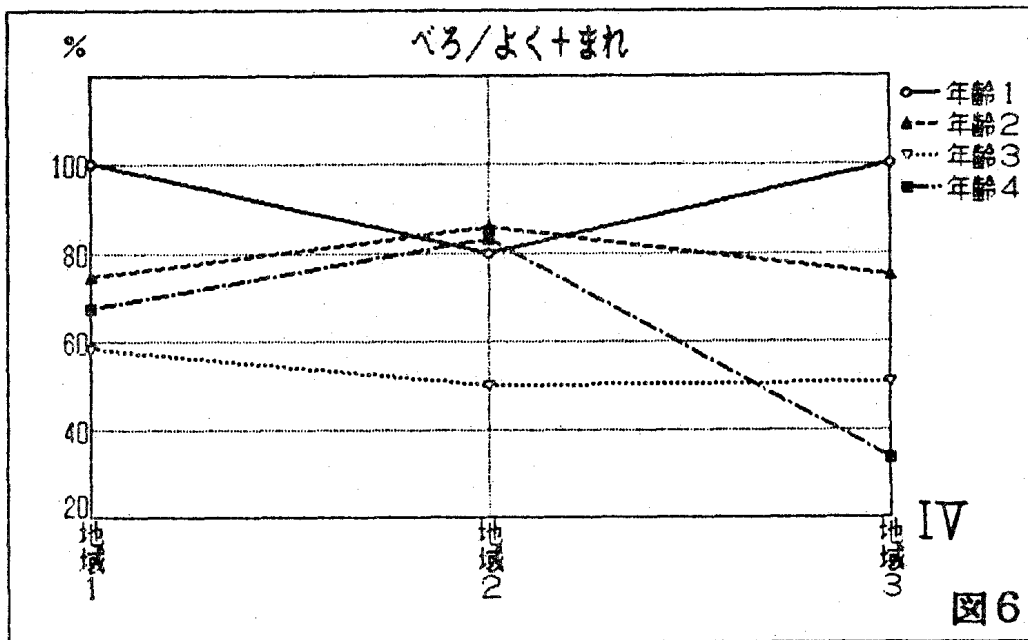
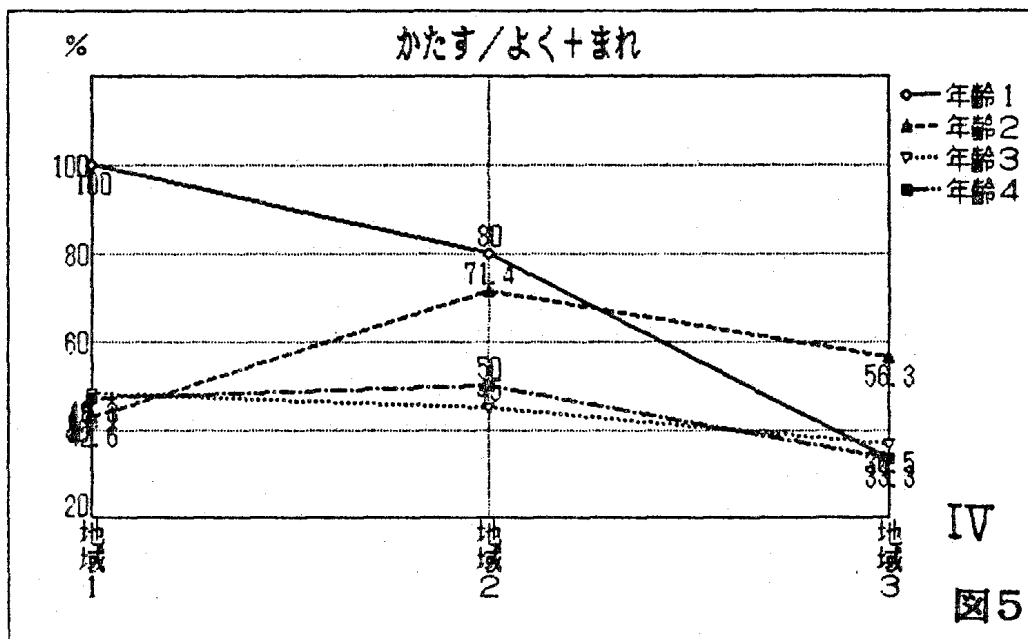
	a (ヨク ツカウ)	b (マレニ ツカウ)	c (ワカルガ ツカフナイ)	d (シラ ナイ)	無回答
ショッパイ	59.3%	25.1%	13.1%	0%	2.7%
カタス	30.1%	16.5%	35.7%	14.8%	3.5%
ペロ	32.2%	29.5%	34.8%	0.6%	2.9%

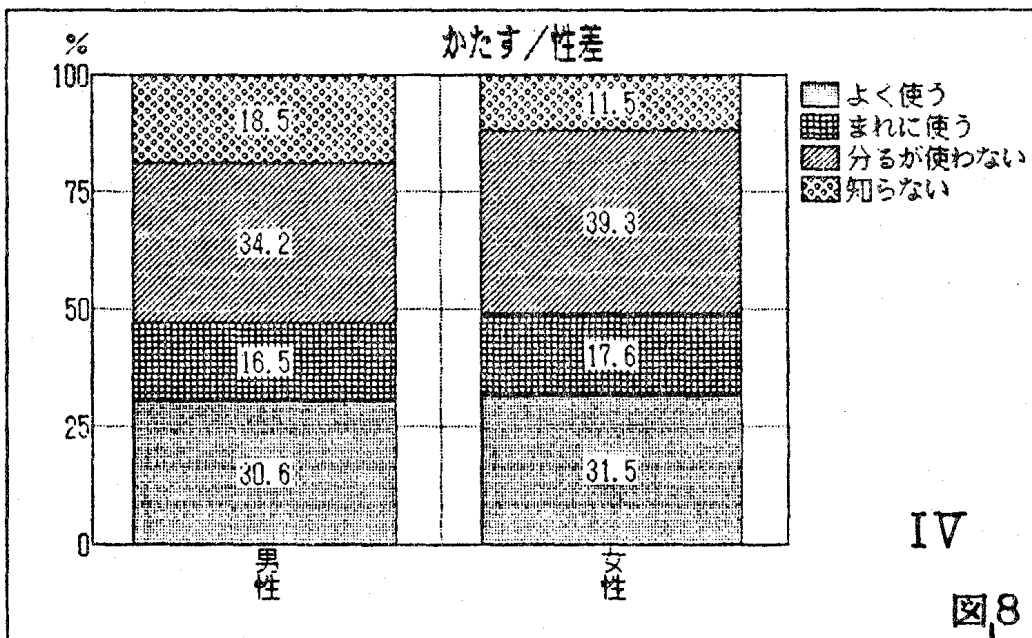
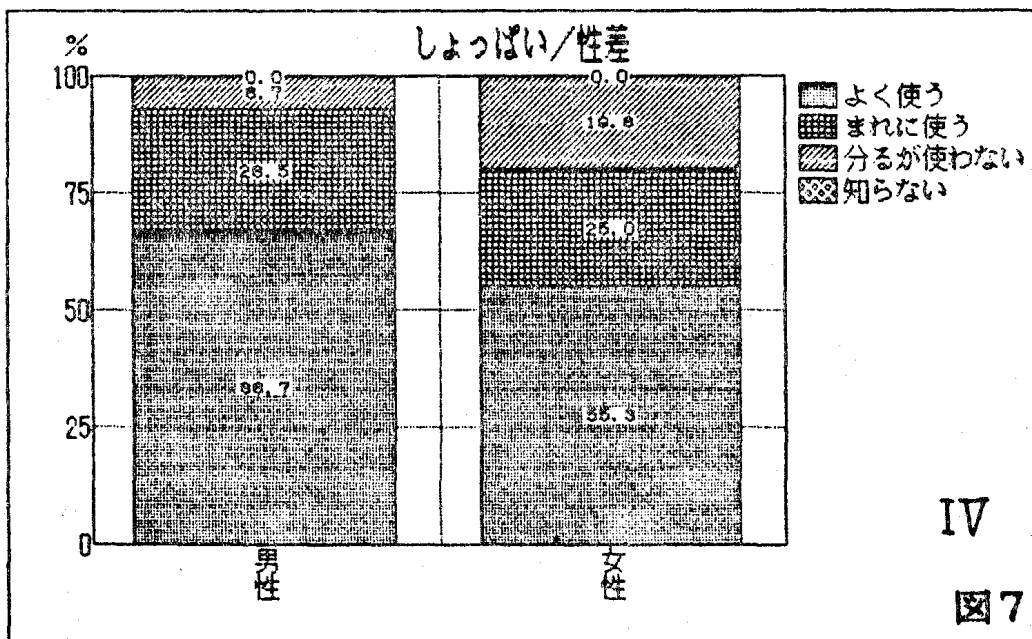
馴染み度が同じ様な割合だからと言って、使用意識が必ずしも同じという訳ではないだろう。例えばここでは、「カタス」と「ペロ」は、d の%を除けば、a, b, c は似たような%を示しているが、はたして同じ様な使用意識が持たれているかどうか、ということのを他の調査結果も併せて考えていくのがこの項目の狙いである。

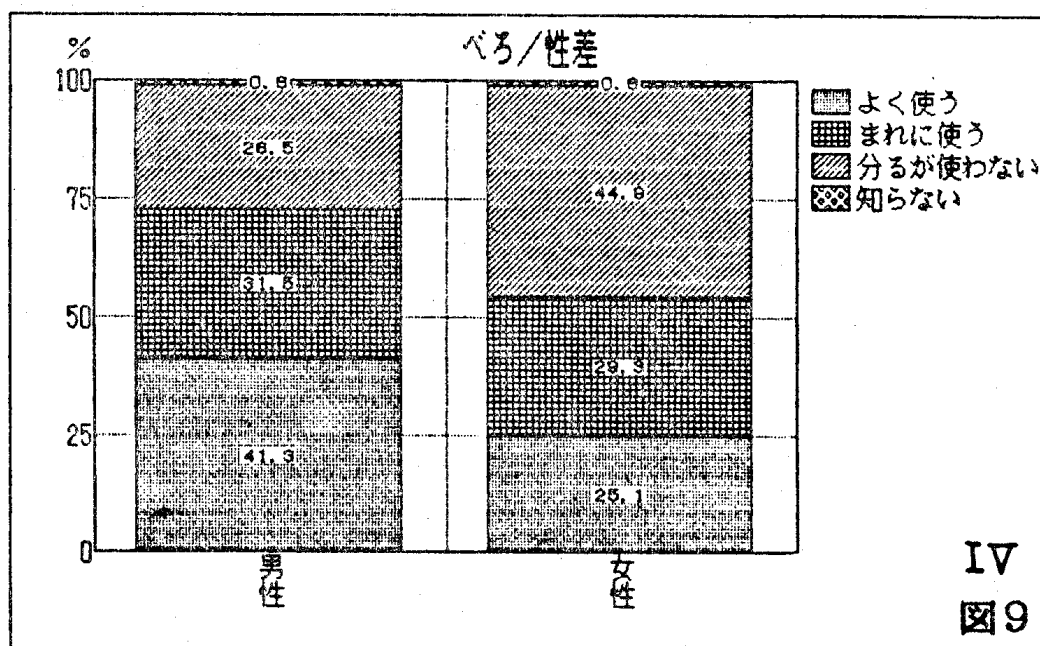
まず、「ショッパイ」・「カタス」・「ペロ」の馴染み度についてもう少し細かくみていくと、地域差は図 IV. 1~3、年齢差は図 IV. 4~6、性差は図 IV. 7~9 のようになった。「ショッパイ」は、全体に馴染み度が高く、





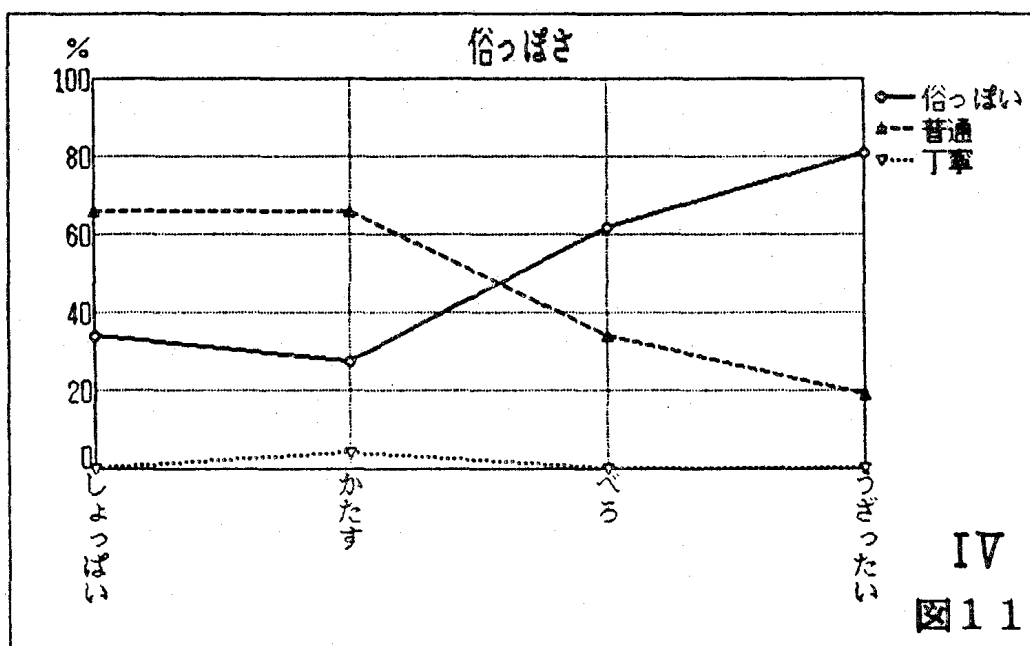
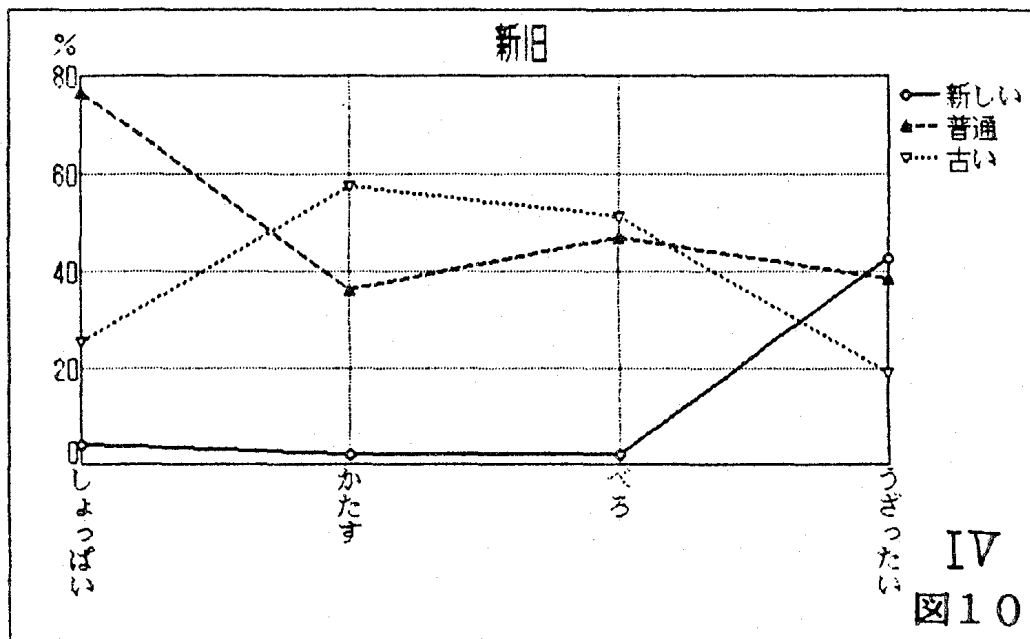




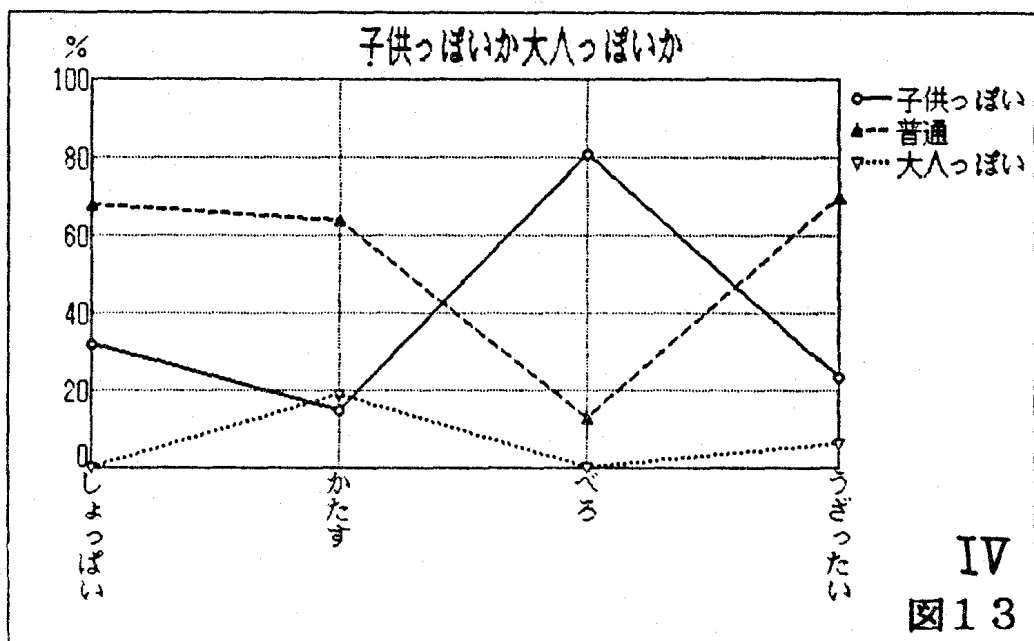
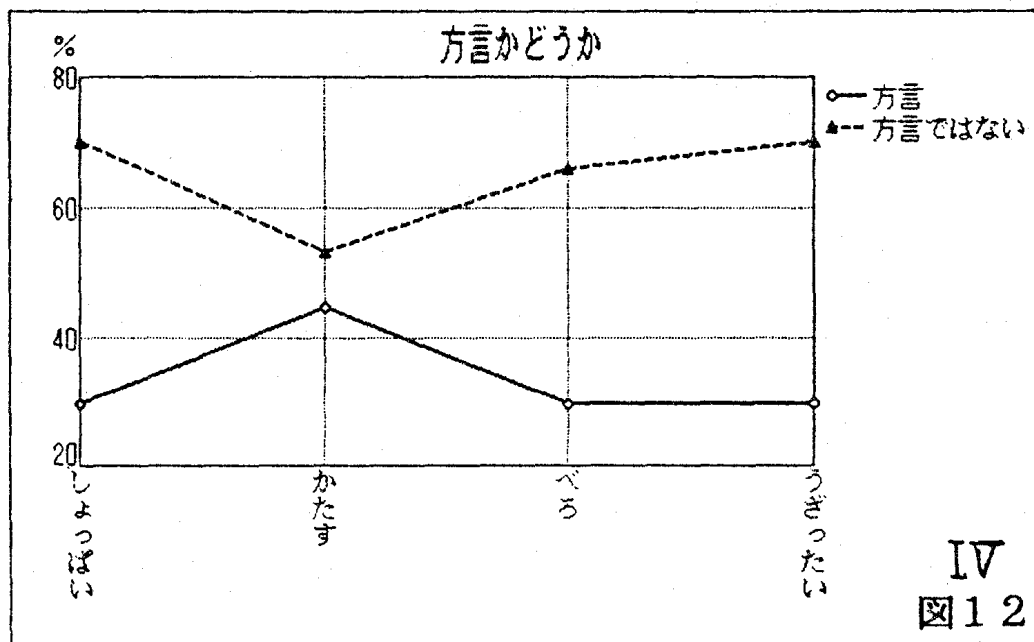


概ね若い方が馴染み度が高い。また、男性の方が馴染み度が高くなっている。地域差がほとんどなかったが、地域3（東京都23区及び首都圏以外）がほとんど東日本だったためと考えられる。「カtas」は、地域3で若干馴染み度が低い。年齢差は地域によっても異なる上、地域ごとにみてもはっきりしない。性別では、女性の方がやや馴染み度が高い。「ベロ」は、地域1（東京都23区内）・地域2（首都圏）に比べれば、地域3で使用度が低い、それでも「使用する」（a+b）が50%を越えている。年齢差は、地域1・3でははっきりと若年層ほど馴染み度が高くなっているのが分かる。性差は、男性の方が馴染み度が高い。ここで注目されるのは、女性にはcの「分かるが使わない」が44.9%と男性の26.5%に比べ、かなり高くなっていることである。ここまでの結果からも「ショッパイ」・「カtas」・「ベロ」の3語が「同じ様な性質の語」ではないことが分かる。次に、各々の語についての意識調査を加え、分析を試みる。

IV.2 馴染み度と使用意識 「ショッパイ」・「カtas」・「ベロ」の3語を含む馴染み度と使用意識の調査を1990.10に東京都武蔵野市内の私立高校1年生91人を対象に実施した。但し、生育地を地域1・2に限ったため



集計したのは、男子生徒 26 人、女子生徒 21 人、計 47 人。調査は、集団記入方式で行なった。調査項目は、上記 3 語・「チガカッタ (違っていた)」・「ワカンナイ (分からない)」・「ショウガンナイ (仕方がない)」・「ヤッパ (やはり)」・「ピンタ (びんた)」・「ズルコミ (割り込み)」・「ウザッタイ (うっとうしい)」・「チョー (大変～)」・「ヤツ (もの・の)」・「イカツク (腹がた



つ)・「イカナキャダカラ (行かなくてはならないので)」・「マジ (まじめ・真剣)」・「ナウイ (今風・流行している)」の計16項目。各項目ごとに、(1) 馴染み度 (よく使う・使う・たまに使う・聞いた事はあるが使わない・聞いたこともない), (2) 項目と同じ意味の別の表現, (3) 誰に使うのか, (4) 新しいか古い (非常に新しい・新しい・普通・古い・非常に古い), (5)

使い始めた・はじめて耳にした時期, (6) 俗っぽいかどうか(非常に俗っぽい・俗っぽい・普通・丁寧・非常に丁寧), (7) 方言だと思うか(方言だと思う・どちらかというと言・どちらかというと言・全然そう思わない), (8) 子供っぽいかどうか(非常に子供っぽい・子供っぽい・普通・大人っぽい・非常に大人っぽい)——の問を設けた。

図 IV.10 が (4) 新旧, 図 IV.11 が (6) 俗っぽさ, 図 IV.12 が (7) 方言かどうか, 図 IV.13 が (8) 子供っぽいかどうかの集計結果だが, 「ショッパイ」・「カタス」・「ベロ」の3語と比較のため「ウザッタイ」を加えてある¹⁾。さらに馴染み度との関係をまとめてみると表 IV.1 のようになる²⁾。表 IV.1 から読み取ることが出来る各語の馴染み度と使用意識は次の通り。

「ショッパイ」は, 馴染み度は非常に高い。「使い始めた・はじめて耳にした時期」は, ほとんどが小学校入学以前で, 53.2% が「誰にでも」使う, と回答している。使用意識は, 新しいとも古いともいえず, 丁寧とは言えないが, 実際は方言なのにも関わらず方言とは意識せず, やや子供っぽいと受け止められていることが分かる。

「カタス」は, 「聞いた事もない」が 19.1% と, ここで取り上げている4語の中では目立っている。また「聞くが使わない」が 57.4% もある。それでも「使い始めた・はじめて耳にした時期」は, 小学校以前が最も多く, 「家族」・「家族・友人」に対して使用すると回答したのが, 各 8.5% と最も多くなっている。使用意識は, 古い言葉で, 丁寧とも俗っぽいとも判断できないが, 方言だという意識はある, といったところ。

「ベロ」は, 馴染み度は高いが, 「聞くが使わない」が約3割もいる。

1) 『新しい日本語——《新方言》の分布と変化——』(井上史雄 / 1985) で「もともと西関東の方言だったのが, 東京の若者の「新方言」として今採用されつつある。」としているなど, 「新方言」の一典型として扱われることが多いため。

2) 「使い・聞き始め時期」・「誰に対して使うか?」は, 最も回答数が多かったものを表に書き込んだ。「地域・年齢・性差」は, 500人調査で確認できたことを記入した。目立つ部分は, 太字の数字にした。

[表 IV. 1]

		ショッパイ	カラス	ベロ	ウザッタイ
使用度	使う	93.6%	23.4%	74.5%	76.6%
	聞くが使わない	4.3%	57.4%	27.7%	23.4%
	聞いた事もない	0%	19.1%	0%	0%
新 旧	新	4.3%	2.1%	2.1%	42.6%
	旧	19.1%	57.4%	51.1%	19.1%
俗っぽさ	俗	34.0%	27.7%	61.7%	80.9%
	丁	0%	4.3%	0%	0%
方言か?	方	29.8%	44.7%	29.8%	29.8%
		70.2%	53.2%	66.0%	70.2%
子供っぽい?	子	31.9%	14.9%	80.9%	23.4%
	大	0%	19.1%	0%	6.4%
使い・聞き始め時期		小学以前 72.3%	小学以前 31.9%	小学以前 72.3%	中学 34.0%
誰に対して使うか?		誰でも	家族, 家・友人	誰でも	友人
地域・年齢・性差 (500 人調査ヨリ)		+若年 +男	+地域 1・2 +女	+若年 +男 (+地域 1・2)	

「使い始めた・はじめて耳にした時期」は、小学校以前が 72.3%。使う相手は、「誰にでも」が 21.3% と最も多く、次いで「家族」12.8%、「子供」8.5% となった。「子供」が回答されたのは、16 項目の内、「ベロ」だけだった。それだけにこの語の特徴を強く現していると考えられる。使用に際しては、古い言葉で、俗っぽいが、本来は方言なのだが方言意識は無く、非常に子供っぽいと意識されていることが読み取れる。

「ウザッタイ」も馴染み度は高いが、「聞くが使わない」が 23.6% 出ている。「使い始めた・はじめて耳にした時期」は「中学校」が 34.0% と最も多い。「高校」も 8.5% となっており、かなり大きくなってから身につ

いた(つけた)語であることが特徴である。また、「友人」に対してのみ使うと回答しているのが 38.3% と最も多くなっている。使用意識は、新しい言葉で、非常に俗っぽく、実際には地域差が有ることが既に報告されているが³⁾、方言とは意識していない、という結果になった。

以上の結果から、4語は今回調査に協力してもらった高校生にとっては、それぞれ異なった使用意識でもって使われていることが考えられる。そこで、試みに4語を分類してみると次のようになる。

「ショッパイ」： 自然に覚えて、方言にも関わらず現在も方言意識を持たずに誰にでも使用している。＝地域差のある日常語＝現在も使用されている方言

「カtas」： 子供の頃から耳にしなかった訳ではないが、古い方言。使うなら身内に対してが多い。＝地域差のあるかつての日常語＝古方言

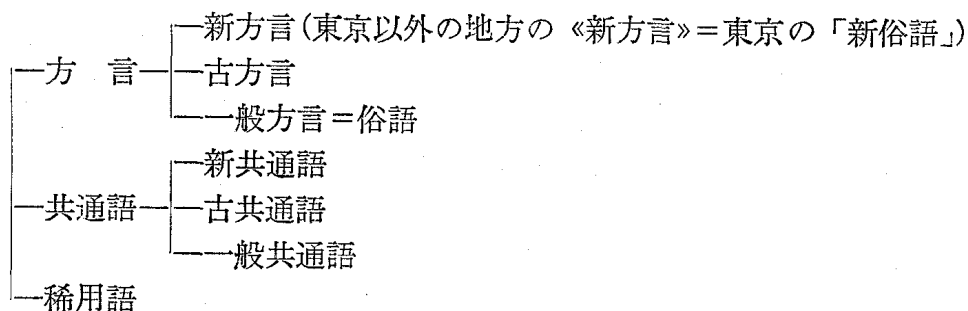
「ベロ」： 自然に覚えたが、非常に子供っぽく、古くて、俗っぽい。＝地域差の少ない俗語・児童語

「ウザッタイ」： 新しくて、非常にに俗っぽい、ある程度大きくなってから意識して獲得した仲間内の言葉。地域差はあるが³⁾意識していない。＝地域差のある新しい俗語

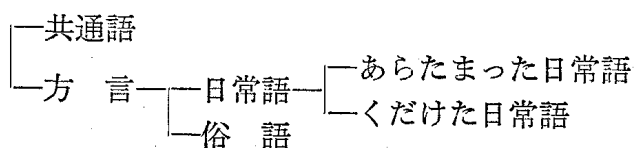
IV. 3 方言と俗語 ここまで馴染み度と使用意識、習得時期、使用相手、地域差、性差の観点から「ショッパイ」・「カtas」・「ベロ」・「ウザッタイ」の4語を見てきた結果、それぞれ IV. 2 で述べたような違いを持っていることが分かった。そこで、問題になってくるのが、方言と俗語の関係である。方言＝俗語とする考え方(図 14)⁴⁾や、俗語を方言の下位区

3) 『新しい日本語・資料図集』(井上史雄・荻野綱男 / 1984), 『新しい日本語——《新方言》の分布と変化——』で都下の若年層に使用者が多いという調査結果が出ている。

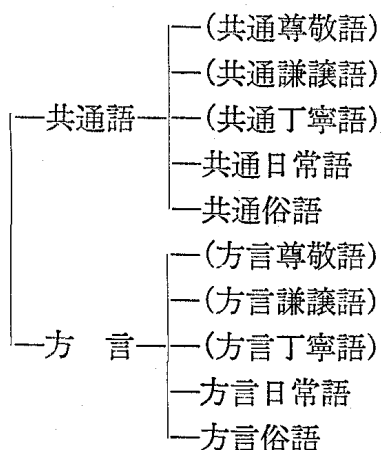
4) 『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』(井上史雄編 / 1983) 第3章「東京における新方言」(荻野綱男・山敷陽子)の4.3「年齢差と場面差と出身地差」, 5「東京における《新方言》とは何か」をもとに田中が図化した。



[図 14]



[図 15]



[図 16]

分とする考え方⁵⁾ (図 15) があるが、「使用意識」⁶⁾ と「習得時期」に重点を置いた観点から見ると、方言と俗語は、「別物」と考えられないだろうか (図 16). また、使用の際 (= 発話の際) に「何らかの意識——敬意・丁寧・俗っぽさ——を持つ」ものと、「何らかの意識を持たない (または持ちにくい

5) 図には含まれていないが、図と同じ章で「新俗語と狭義の《新方言》とは、定義に従えば、使用場面 (と意識) の違いとして判別される. (中略) 《新方言》と新俗語の判別 (ひいては日常語と俗語の判別) には、話し手の持つ語感を利用することも出来る.」とも述べている.

6) 「使用度」の「分かるが (聞くが) 使わない」もある意味で、「使用意識」とも言える.

く)」もの(=日常語)とに分かれはしないだろうか。更に年齢差・地域差・細かな意識差等を盛り込んだ調査を加え、考えてみたい。語彙のみでなく、アクセント・文法の面からも同様な調査を実施してみたい。

V. 和から洋へ (秋永一枝)

V.0 東京における日本の生活習慣は、関東大震災とその二十数年後の

表 V.0 辞書注記のアクセント

	美	神	三	NA	金	秋	平	NB	NC	柴	N研
洗い張り(をする)	2	2	2	2	2	2	2,0	2,0	2,0	3,2,0	3,2
□糸巻き(にまく)	0	0	0	0	0,2	0,シ2	0,2	0,2	0,2	2,3,0	0,2
△おくみ(をつける)	3	3	0	3	3	3	3	3	3	0,3	0,3
△お月様	N	1	N	N	N	1	1,3	N	N	N	N
お針(を習う)	0	0	N	0	0,2	0,シ2	0,2	0,2	0(2)	0,2	0,2
鹿の子(のもよう)	2	2	2	2	2,1	2,1 (1,=2)	2,1	1,2	1,2	0,1	1,2
×麻の葉(のもよう)	3	N	3	3	3	3	N	3,0	3,0	0,3	0,3
足袋屋	N	0	N	2	N	0,シ2	N	2	2	N	2
手まり(をつく)	1	1	1	3	1,3	1	1	1	1,0	0,1	0,1
でんでんたいこ	t3	N	N	t5	d3,5	t(d)3,5	t5,3	dt5	dt5	d5	d5
□緋縮緬	0	0	0	0	0,2	0,シ2	0,3	0,2	0,2	2	2,3
◎四万六千日	6	6	N	6	2	6,2	N	2	2	(注2)	2
◎(...)煙草盆だ	3	3	N	3	3	3	3	3	3	0,3	3,0
爺や(がいる)	N	3	N	3	N	3,シ1	1,0	1,3	0,1	N	1
婆や(がいる)	N	3	3	3	N	3,シ1	1,3	3,1	3,1	N	3,1
◎忠孝(の二字)	N	1	1	1	1	1	1	N	N	0,1	0,1
○とうなす(がすき)	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0,1	1,0
×五(になる)	0,1?	0	1	0,1	1,0	1,=0	1	1	1	1	1
×九(になる)	0	0	1	0,1	1,0	1,=0	1	1	1	1	1
×巢(がある)	0	0	0	0	0,1	0,シ1	0,1	1,0	0,1	1,0	1,0
◎魔(がさす)	0	N	0	0	1,0	0	0	0	0,1	0	*0,1
◎桶屋(がもうかる)	0	0	N	0	N	0,シ2	N	0,2	0,2	N	0,2

注 1 ×は「馴染み度調査」にないもの

□○△◎は既に発表したもの

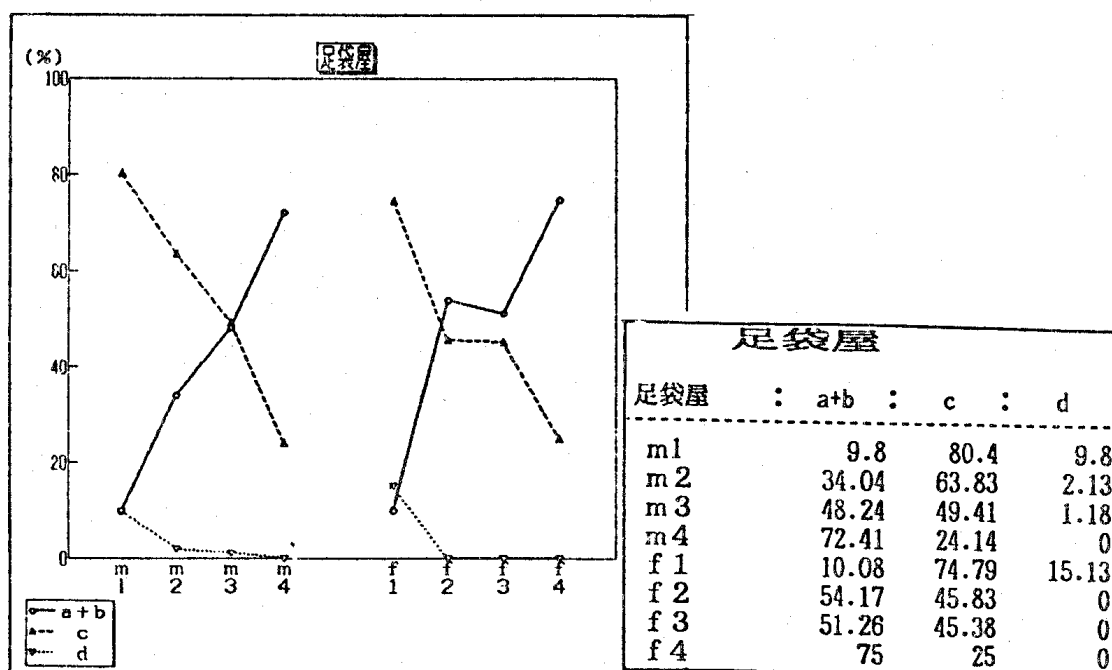
注 2 柴は「四万六千日」2=0, 2, 1=0

注 3 * には「～がさす」の用例がない

戦災を経て急速に激減した。明治時代に育った女たちの殆どは着物世代であり、家庭で洋服を着だしたのは戦後のことであろう。明治生れの私の母やおばたちは、頑なに着物での一生を終えていった。そうした生活には、節目の行事も、伝統的な紋様や色目や遊びの言葉も生きており、子の世代までそれらは細々と伝えられたが、孫世代には馴染み薄となってしまった。それら「和」の習慣の変化を、馴染み度とアクセントとの関係において考えてみる。辞書注記のアクセントについては「表 V. 0」を参照して頂きたい。

V. 1 「足袋屋」「洗いはり」

着物ばなれが進んだために馴染み度が低くなったものに「足袋屋」がある(図・表 V. 1 参照)。一度も足袋をはいたことのない成人(特に男性)が



図・表 V.1

いる現代では、馴染み度が低くなるのも当然だが、「足袋屋」が「足袋を売る店」という理解はあるわけで、d (知らない) の解答はごく少ない。この d は、「現在そういう店が存在することを知らない」という答であろう

が¹⁾、30歳以上の d は女性では皆無であり、男性も 1~2% でごく少ない。70歳以上の a+b (よく、または稀に使う) をみると男性が 72% 強、女性が 75%、c (知るが使わぬ) はともに 25% 前後と相似する。若年層の馴染み度も男女の%が接近している。この表で異なるのは 2 (30~49歳) の世代で、a+b の女性の%は男性より 20% も高い。この年代の女たちは男に比べて着物に親しむチャンスが多いせいと言える。

だが、この語は比較的早く平板型から中高型へと変化が進み、『日本語アクセント辞典』(1943)で既に ② 型のみが記されている。秋永の高年層調査²⁾でも、20人中8人が ① 型、12人が ② 型で、男女差はでなかった。旧市内にはみられる「足袋屋」も新市内では稀となり、専門店で足袋を買うことがなくなってきたことがこの語の使用度を低くし、アクセントを変化させる原因となったものであろう。現在では「足袋屋」はおろか「呉服屋」にまで行かずとも、デパートやスーパーで事足りる御時世だからである。この「呉服屋さん」という言葉も、若年層には馴染みの薄い言葉となった。先日 NHK の朝の番組でゆかたを見に行く場面があり、女性アナウンサーが「次は着物屋さんです」と言ったのには驚いたが³⁾、「呉服」という場合はもっと馴染み度が低くなるであろう。

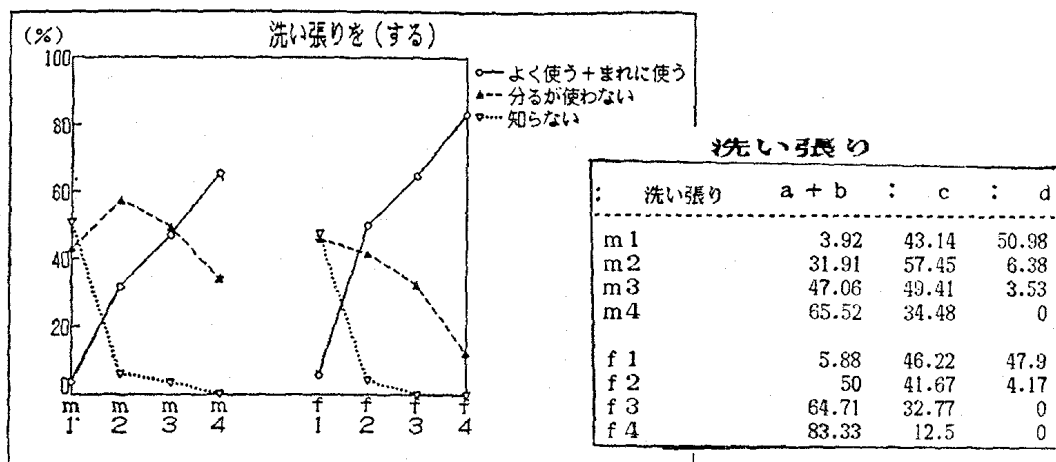
「洗いはり」なる語も、同じような運命にある(図・表 V. 2 参照)。20代の馴染み度は、女性が男性より若干高いという程度だが、30歳以上では 20% 近い開きがでる。

なお早大文学部の学生に行なったなぞなぞ式調査では、正答率が女子学

1) 1989年の研究発表会の折、若い男性研究者に、足袋屋を見たことがないが現実には存在するか? という意味の質問を受けた。尚、墨田区緑町の喜久屋(足袋屋)さんの御主人、故宮内寒太郎氏も ① 型であった。

2) 今回は明治36年から大正12年までの男女各10人を報告の対象とした。話者及び保育者ともに東京都区内生育であることを原則とし、言語の専門家や辞書・出版関係者を対象からはずし、一般庶民の発音の収集を心がけた。

3) 1991年7月30日朝8時40分 NHK 総合。着物ばなれの例としては、モデルの着た「長じゅばん」をさして、(紅の)「肌じゅばん」(は保温性がある)と言わせている例もあった。NHK 総合「くらべてみれば 紅 VS. 藍」(1991.6.10)



図・表 V.2

生 27.8% に対し男子学生 13.8% であった。この数字は、20代の a+b (使用語彙) と c (理解語彙) の%が女性 52% 対男性 47% にくらべて男女差がありすぎるし、男女ともに%が低すぎるようであるが、対象と調査方法が異なるためである。一つにはなぞなぞ式と語形を与えたのとの違いであり、今一つは学生の年齢が 20~21 歳と若かったのと 20 代との相違である。教室の解答には「洗いばり」「洗い針」各 1 名がいた。仮名表記と指定すれば濁音形がもう少し増加したかと思われる。

女性の馴染み度の a+b では、1 (20 代) と 2 (30~49 歳) の間に 44% もの開きがある。若い女性は晴着を着ることはあっても「洗いはり」に出すのは母親たちであるから、大差があって当然である。まして卒業式の袴姿の殆どが借着であることも、「洗いはり」や「いけ洗い」の語を遠くさせた。

女性の使用語彙でも、2 の世代から 3 (50~69 歳) の世代へは約 15% の、3 から 4 (70 歳~) の世代へは約 20% の開きがある。張り板や伸子を使っていたのは正に 4 の世代であり、いやいや手伝っていたのが 3 の世代だと考えると、この 20% の差が現実味を帯びてくる。

高年層のアクセント調査では、男女によって多少の差が現れた。

女 ② 7 人, ③ 2 人, ④ 1 人,

男 ② 6 人, ③ 2 人, ④ 1 人, ⑤ 1 人

この語は対立語で、前部成素は平板型であるから、その最後の拍まで高

い型になることが多い。それが、-ail- のために前の拍にアクセントの切れめが移って、② 型となったものである。今回のアクセント調査では、音韻とアクセントの関係が深い語を相当数含めており、個人によってそのアクセント核の移り方に傾向のあることが確認できた。音韻によるアクセントのずれの多少には、地域差のほかに個人差もあるということである。但し、この類の聞きとりは発音者のゆれもあって判断がむずかしい。

『新明解国語辞典 第四版』が ③ ② ① の順であるのは、以下の『東京語アクセント資料上・下』によったものである。

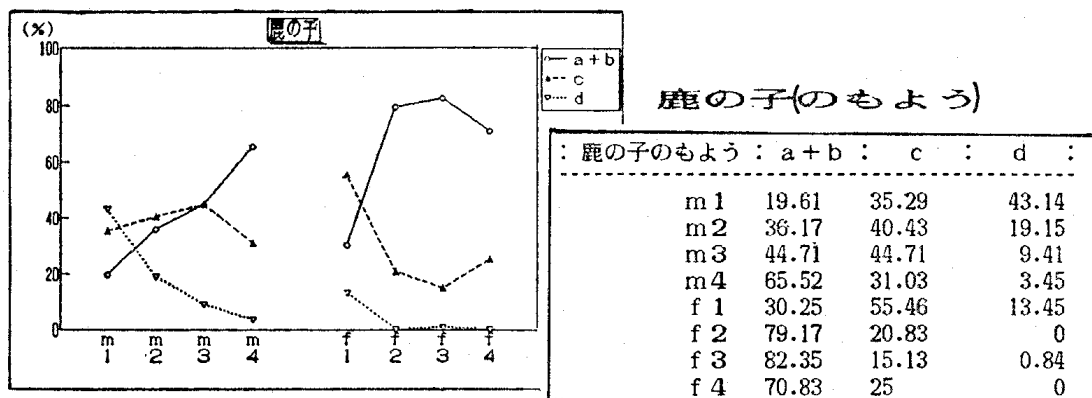
② 5人, ③ 10人, ① 5人, ② ③ 1人

① 型の1人はアライバリで、これはこの語の使用者とは考えにくい。また ③ の中には、② を ③ と聞きなした場合もあったのではあるまいか。

V. 2 「鹿の子」「麻の葉」

伝統的紋様の一つである「鹿の子」も、若年層の、特に男性には馴染みの薄い言葉である。絵を示してのなぞなぞ式調査では、女子学生の正答が17% 弱であるのに、男子学生は0% であった。調査のあとで、「アア、鹿の子だった!」とくやしがる女子学生もいて、布で示せばもう少し正解率が上がったかと思われる。同名の菓子もあり、ポロシャツなどに「カノコ」とかく織りもあること故、言葉と実体が結びつかない例といえる。歌舞伎などの変化物に用いられる「うろこ形」も、「三角(模様)」と答える若者が多い。言葉も模様も知りながら、実体と名称とが結びつかないのは、現実には馴染みの薄いのが原因である。これらは文字による習得が殆どであろうから、アクセントは多数形を類推して発音することになる。

若年層の馴染み度をみると、男性の d は女性の 3.2 倍もある(図・表 V. 3 参照)。また 30 歳以上では女性の d がほぼ 0% であるのに、男性では 2 の世代が 20% 弱、3 の世代が 9% 強、4 の世代でも 3.5% 弱というように d の率が高い。a+b では 1 の世代が男 20% 弱対女 30% 強、2 の世代が 36% 強対 80% 弱、3 の世代が 45% 弱対 82% 強、4 の世代が 66%



図・表 V.3

弱対71% 弱のように男女差がはげしい。

高年層のアクセント調査では、明治36年生れの女性、明治40年生れと大正6年生れの男性が伝統的な②型であるほかは、すべて①型であった⁴⁾。

『東京語アクセント資料』では、高年層の女性1名が②型、15名が①型であるが、男性4名と女性1名が①型と記される。『新明解国語辞典第四版』では、この①型が優勢になるとみたためか、①②の順である。②型から①型になるまでは使用語彙のアクセントだが、①型は「鹿の子」(模様や菓子)に馴染みの薄い人の類推アクセントと思われる。

馴染み度調査はしなかったが同様の傾向のものに「麻の葉」がある。絵によるなぞなぞ式調査での正答は、女子学生の9%に対し男子学生は0%であった。この模様は、麻のように丈夫ですくすく育つようにとの願いをこめて、産着に限らず子供の衣類や蒲団、小物類に永年用いる習慣があった。これを使用語彙とする高年層は複合の強い③型を用いている。それが単に「麻の葉っぱ」と受けとられた時は、連語のアクセントである①型に発音されるのも当然である。辞書類には模様も含めて「連語」とするものもあるが、模様ならば「松の葉(=心ばかりの贈り物の意)」と同様名

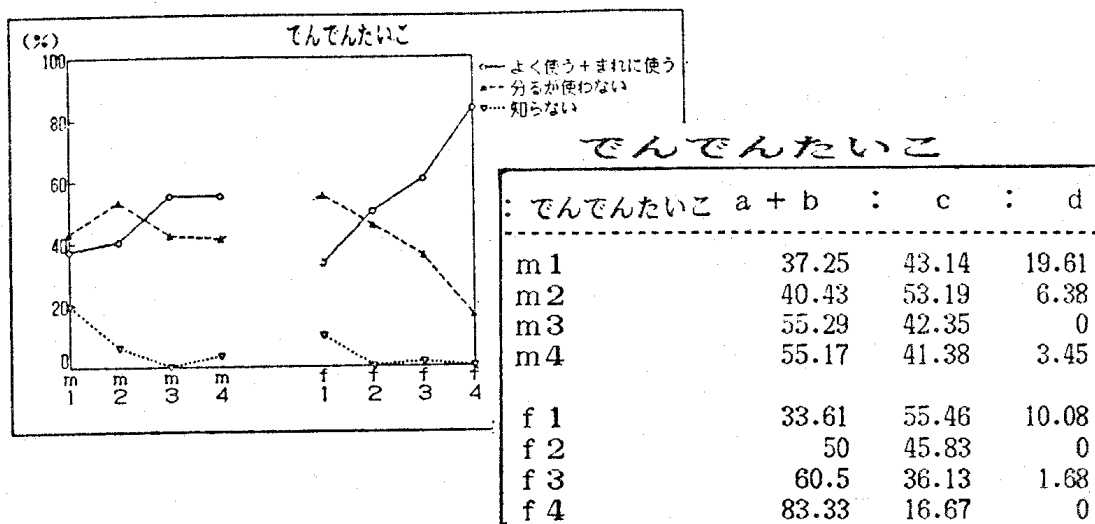
4) 『明解日本語アクセント辞典』は、はじめ②①の順としたが、後に「①、古くは②」と訂正した。

詞にするのが望ましい⁵⁾。

高年層の若干名調査ではすべて ③ 型であったが、『東京語アクセント資料』では、高年層の女性3名と中年男性1名の ③ 型をのぞき、すべて ① 型(但し、1名は ④ 型)である。『新明解国語辞典 第四版』と『大辞林』はともに ① ③ の順となった。これら ① 型は音声を媒介とせず、理解語彙としての類推アクセントではないだろうか。大量語彙の調査ではむずかしいが、このような言葉は語形を与えない形での調査も今後行ないたいと思っている。

V. 3 「でんでん太鼓」「手まり」

伝統的なおもちゃである「でんでん太鼓」は、子守歌で知られている。馴染み度調査で高年層女性の83%強が使用語彙としたのは、子育ての際この子守歌が生きていた時代だからであろう(図・表 V. 4 参照)。30歳以上の女性には d は殆どいない点も男性とは異なる。歌では「デンデン・タイコニ」と休止を入れて不連濁形で歌う。『日本大辞書』(タ ③ 型)。



図・表 V. 4

5) 『新明解国語辞典第四版』の解説には、「麻の葉を組み合わせたような(正三角形の連続構成)模様。」とある。色彩を考えると()内は「六個一組のひし形連続構成」とすべきだろう。第2章に上げられた「油単」の辞書の解説も、油びきの紙や布をたんすにかけるなど、多くは現状にそぐわない。執筆者が男性に偏るのが原因の一つと思われる。

『大辞典』(1936 初版・タ)・『日本語アクセント辞典』(1943. タ ⑤ 型)はともに不連濁だが、『明解国語辞典』(初版)で始めて連濁形(ダ ③ ⑤ 型)が現れる。『明解アクセント辞典』(初刷)はタ見出し ③ ⑤ 型の順で「(タはダとも)」としたが、後の調査でタ見出し ③ 型のみとした。だが ⑤ 型は次第に優勢となり、遂に『新明解国語辞典第四版』及び『大辞林』に至ってダ見出し ⑤ 型のみとなった。

馴染み度調査では清濁を問わなかったが、高年層アクセント調査では20名中ダ形で発音したのは男性1名であった。若年層10名のアクセント調査ではタ・ダが半ばであったが、今後は恐らくダ形が優勢となるだろう。

絵を示したなぞなぞ式調査では、男女を問わず正答率が高かった。仮名書きと指定しなかったため清濁の傾向はつかめていない。

高年層のアクセント調査では、次のように男女差が現れた。

女 タ ③ 6名, タ ③=① 1名, タ ⑤ 3名

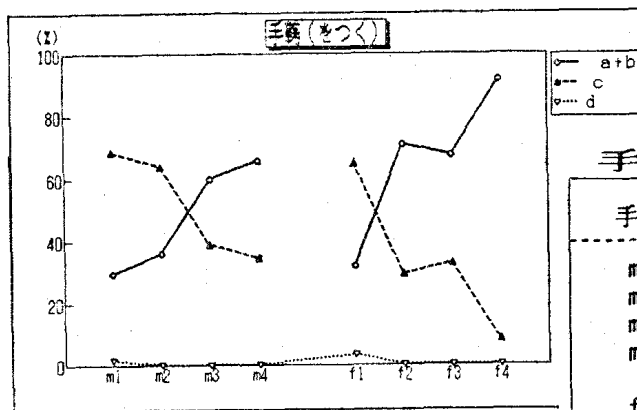
男 タ ③ 4名, タ ⑤, ③ 1名, タ ⑤ 4名, ダ ⑤ 1名

女性のほうが ③ 型が多く、男性は ③ と ⑤ がほぼ伯仲する。ダ形が男性の ⑤ 型1名であるのも、高年層の馴染み度に30%近くの男女差があることと関係するだろう。

「手まり」の辞書のアクセント注記もこれと似た傾向がある。伝統的な①型のほかに、『日本語アクセント辞典』では③型のみ、『明解国語辞典』では①③両型が記される。更に『新明解国語辞典 第四版』と『大辞林』は①①型の順となる。これは、高年層も①と①両型、若年層は圧倒的多数が①型という『東京語アクセント資料』によったものである。

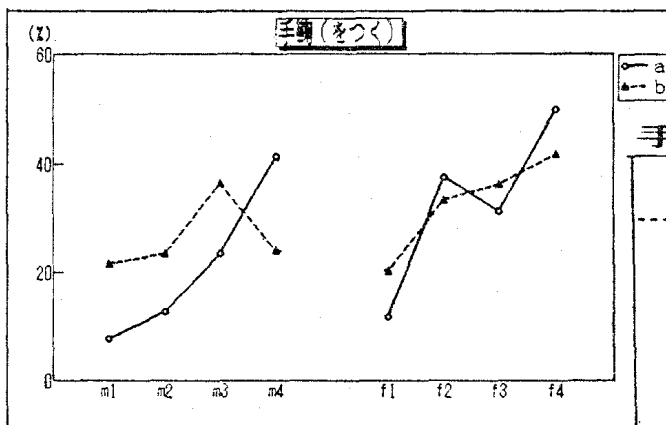
秋永の高年層調査では、男性2名・女性1名が③型の他は、17名すべてが①型のみであった。

馴染み度をみると(図・表 V. 5 参照)、使用語彙の%は若年層では男女ともに30%前後で変わらないが、30代・40代では女性が男性の2倍に近



手鞠 (をつく)

手鞠	a+b	c	d
m1	29.41	68.63	1.96
m2	36.17	63.83	0
m3	60	38.82	0
m4	65.52	34.48	0
f1	31.93	64.71	3.36
f2	70.83	29.17	0
f3	67.23	32.77	0
f4	91.67	8.33	0



手鞠 (をつく)

手鞠	a	b
m1	7.84	21.57
m2	12.77	23.4
m3	23.53	36.47
m4	41.38	24.14
f1	11.76	20.17
f2	37.5	33.33
f3	31.09	36.13
f4	50	41.67

図・表 V.5

い. 50代・60代が7%の差であるのはインフォーマントの偏りによるかもしれないが、70歳以上では女性は男性よりも26%も高い。但し、使用語彙といっても「よく使う」「まれに使う」で分けると、50%に達するのは70歳以上の女性のみである。また、この世代では男女ともにaがbが多いが、これ以下の世代では女性の30代・40代を除いてはbがaが多い。

布製にしるゴム製にしる、手まり歌を歌いながら毬をついたのは、昭和一桁の女性までであろう。馴染み度とアクセントの変化は、明瞭にそれを物語っていると言えよう。

V.4 日本人の生活習慣が和風から洋風へと変化してゆくにつれて、純

和風用語は使用語彙から理解語彙へ、更には理解すらできない言葉になってゆく。また、以上でとり上げた言葉は、その殆どが家庭内で使われるものである。これらは、話者の生活環境のほかに保育者の生育地とも関わりをもつ。話者にとって使用語彙であっても、保育者の生育地が東京でなければ伝統的な東京アクセントは伝わらない。祖母の使う「貝杓子」が東京で生育した母と子に使用言語として伝わることもあるように、放送にも現れない家庭内専用語彙は他人の言葉を聞いて変化することも少ない。

高年層アクセント調査と『東京語アクセント資料』との相違も、単に馴染み度だけの問題ではない。恐らく前者が、本人及び保育者ともども東京都内生育を原則としたことと関係があるろう。今後は、家庭内専用語か否かを念頭において、調査と分析を進めたいと思っている。

(1991. 9. 17 提出)